

「男、突っ走る！」

第
100
回

第
一
稿

作・壽倉
雅

登場人物

大坂	辻松	赤澤	林原	加原	加原	大森	月島	北川	山岡	鈴岡	弘田	鬼頭	坂本	麦沢	阿川	大山	山森	住吉	橋岡	本村	田所	山中	国枝	国枝	高山	山辺	田崎	木内	木内	登壇人物
理央	隆翔	亜里沙	千世	美穂子	泰明	藍那	まひる	裕作	ゆりえ	翔洗	子	翔子	寿梨	愛花	美緑	直央	直海	真由美	直政	晴臣	俊子	敦夫	茉奈	佐代子	康行	一磨	良樹	真保	雅也	
(12)	(11)	(11)	(12)	(13)	(35)	(58)	(22)	(22)	(20)	(19)	(23)	(73)	(20)	(20)	(30)	(17)	(19)	(42)	(48)	(54)	(63)	(44)	(27)	(59)	(24)	(24)	(24)	(51)	(24)	
ミュージカル出演者、美央の妹	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	ミュージカル出演者	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	ダンス講師	舞台俳優	音楽プロデューサー	市民映画プロデューサー	劇団主宰者	佐代子の娘	『スリジエネ』総合プロデューサー	中央高校元組生徒	中央高校元組生徒	中央高校元組生徒	雅也の母	『オフィスツリーイン』代表	

河熊藤

辺瀬田

真怜昇

理恵奈平

(22)(18)(22)

『ススス
リリリ
ジジジ
エエエ
ネネネ』
メンメン
バーバー

1 中央交流センター・エントランス

雅也と佐代子が話している。

雅也「『神様が願うまで』が終わったら、

『スリジェネ』を卒業しようかと思ってます」

佐代子「……」

雅也「……」

佐代子「そう……。そんな気はしてたわ」

雅也「国枝さん……」

佐代子「確かに、『神様が願うまで』が終わった後の予定も決まっていな、そろそろ活動を終了させるタイミングなのかもしれないわね」

雅也「……」

と、寿梨が通りかかり、雅也と佐代子の様子を見ている。

2 同・第一会議室

休憩中。

翔子が弁当を食べており、まひる、藍

那、亜里沙が談笑している。

藍那「ステージに立つのなんて久しぶりだから、ちよつと緊張しちゃう。リハーサルとはいえ」

まひる「このステージ、立ったことあるの？」

藍那「去年ね。夏祭りのキャンペーンガールのオーディションで」

まひる「え、藍那さんあれ受けたの？」

亜里沙「すごい、さすがは藍那さん」

藍那「まあ最終審査で落とされたんだけどね。

結局は審査員の好みもあるだろうし」

亜里沙「どうかしてるね、その審査員」

まひる「アリサちゃん言うねえ」

と、コンビニの弁当を持った雅也が戻ってくる。

隆太「あ、うちーお帰り」

雅也「ただいま」

と、翔子の隣に座り、

雅也「翔子さん、お隣よろしいでしょうか？」

翔子「どうぞどうぞ。一緒に食べましょう」

雅也「いただきます。（と弁当を食べ始める
と）いよいよリハですね」

翔子「去年、初めてうちーと一緒にあの舞
台立ったでしょ。リハの時は、このままで
この子たち大丈夫なのかって、心配してた
のよ」

雅也「申し訳ないことです。實力不足で……」

翔子「でもみんな、本番の時は素晴らしいぐ
らい伸びてた。若い人の成長を実感したわ。
うちーも、とても初めて舞台に立った人
とは思えなかったもの」

雅也「とんでもない。僕こそ、翔子さんの演
技を初めて見たときは衝撃で……。今回も
お芝居としてご一緒するところはありません
けれど、翔子さんと同じステージに立てる
ことは、光栄だと思ってます」

翔子「最初の頃と比べたら、うちー本当に
成長したと思うわよ。きっと、国枝さんや
山中さんと一緒に活動したからね」

雅也「ええ……」

翔子「あ、そうだ。うちーに、これあげるわ。(と鞆から花柄の筆箱を取り出す)」

雅也「良いんですか？」

翔子「昨日、マルシェで安売りしてたから買ったのよ。でもよくよく考えたら使うことなくてね。うちー、こういうの好きなんじゃない」

雅也「はい、ありがとうございます」

3 同・ホール

舞台上に立って集合している雅也、直海、美央、緑、愛花、寿梨、翔子、洸、ゆりえ、裕作、まひる、藍那、泰明、美穂子、千世、亜里沙、隆太、翔、理央たち出演者一同——観客席側で立っている佐代子、山中、茉奈、田所、本村、住吉、橋岡、昇平。

山中「では今からリハーサルを行います、その前に紹介します。(と橋岡と昇平を見

ながら）舞台監督をしてくれる橋岡直政さんと、照明助手をしてくれる元『スリジエネ』メンバーの藤田昇平君です」

橋岡「橋岡です。『スリジエネ』の舞台にはこれまで二回、客演として出演させていただいております。今回は舞台監督して、皆さんが円滑にそして安全に舞台に立てるよう裏方としてしっかりとフォローさせていただきます。よろしく申し上げます」

一同「よろしく申し上げます」

藤田「元『スリジエネ』メンバーの藤田昇平と言います。今回ヤマさんにお声がけいただき、照明助手をさせていただきます。よろしく申し上げます」

一同「よろしく申し上げます」

× × ×

会場全体が薄暗くなっている——山中がマイクを持つと、

山中「それでは今から通し稽古始めます。基本的に最後までノンストップでいきます

が、ステージ上で何か事故の可能性等がある場合は迷わず止めてもらって構いません。出演者の安全が第一なので。また体調不良などがあつた場合は、近くのキャストもしくは運営陣に伝えてください。それでは始めます。よーい、スタート」

と、BGMが流れる。

観客席で見ている佐代子と本村。

本村「こうして形になるのを見ると、やっぱり良いもんだね」

佐代子「素敵な楽曲制作、さすがはハルさん」
本村「ありがとう」

観客席の後ろの方で、リハーサルを見ている怜奈と真理恵。

4 同・表（夜）

雅也、直海、美央、愛花、寿梨、昇平、
真理恵、怜奈が話している。

直海「びっくりしたよ、まさかレイナとマリ
エが来てるなんて」

美央「ステージから見てて、あれって思ったもん」

真理恵「驚かせようと思ってね」

怜奈「私たち、本番は予定入ってて見に来れなくてね。でも何とか、この作品だけは見たいと思ってヤマさんに相談したら、今日リハーサルがあるからおいでって」

愛花「ショウが照明助手に来たのも驚いたけどね」

寿梨「本当だよ。言ってくれたら良いのに」
昇平「てつきり話行ってると思っただよ。」

照明助手になる話は、前から決まっていたから
「ら」

愛花「じゃあ、うちーは知ってたんじゃないの」

雅也「知ってた」

一同「おいッ」

雅也「だって、ショウの話はヤマさんか国枝さんから話行ってると思っただから。元メンバーだし」

直海「よくある、誰かが言うだろうと同じね」

雅也「しようがねえべ」

愛花「何で訛ってるのよ」

雅也「そういえば、本番のほうはとみーとコ

ウタ、見に来るんだもんね。あの二人にも、

素晴らしい作品を見てもらわないとね」

真理恵「結局、あの二人同棲してるの？」

直海「とみーは今、社員寮に住んでるみたい

だけど、近いうちに出るって言ってたよ」

寿梨「間違いなく、同棲だね」

雅也「本番の日、みんなで質問攻めしてやる

か」

美央「賛成ッ」

笑い合う一同。

5 木内家・居間（夜）

雅也と真保がテレビで天気予報を見て

いる。

真保「台風、これ直撃じゃないかな」

雅也「困ったな」

真保「どうして？」

雅也「来週の日曜日、ハロウィンライブあるんだよ。土曜日が前日リハなんだけど、大丈夫かな」

真保「絶対直撃だよ」

雅也「……」

6 同・雅也の部屋

台本を読んでいる雅也——と、スマホに通知が来る。山中からLINEが来ている。

山中の声「うっちー、お疲れ。メンバー卒業すること、国枝さんにちゃんと伝えただってね。よく打ち明けたね」

返信する雅也。

雅也の声「お疲れ様です。早いですね、もうヤマさんの耳に入ったなんて」

と、山中から返信が来る。

山中の声「ジュリが教えてくれたんだ。今日、リハの前に、エントランスで国枝さんと深

刻そうな顔で話してるのを見たんだって」

返信する雅也。

雅也の声「そうだったんですね。いろいろ迷

いましたが、ここがタイミングかと思って」

と、山中から返信が来る。

山中の声「演劇の世界は広い。何も活動でき

るのは、『スリジェネ』だけじゃな」から。

これから更に活動するうちーを、俺は応

援するよ」

返信をする雅也。

雅也の声「ありがとうございます！」

ふと寂しい顔になる雅也。

7 中央交流センター・エントランス（数日

後）

雅也、佐代子、田所、茉奈が会議をし

ている。

佐代子「（雅也の筆箱を見て）あれ、うちち

ー筆箱変えた？」

雅也「そうなんですよ。これ、この間のリハ

の時、翔子さんからいただいたんです」

田所「それすごいことよ」

雅也「え？」

田所「翔子さん、普段共演者の人とはそこま
で仲良くなならないようにしてるのよ。筆箱
もらうなんて、さすが世代を超えてコミュ
ニケーションを取れるうちーね」

雅也「そうなんですか」

茉奈「翔子さんに気に入られたら、間違いな

いね」

雅也「恐縮する思いですね。（と佐代子に）

あ、ところで来週のハロウィンライブ、ど
うなりそうですか？」

佐代子「主催者側と相談してるんだけど、多
分中止か延期ね」

雅也「延期ってなると、ステージに出る意味
あるんでしょうか？ あれは、『神様が願
うまで』の宣伝を兼ねての出演ですから」

佐代子「翌週の延期なら、まだ宣伝として間
に合うけど、翌週は確か別のイベントで、

このエントランスが使われるから、頑張っても翌々週になるわね」

茉奈「てことは、ミュージカル本番の翌日？」

田所「本番翌日だから、一応特に予定は私も入れてないけど」

雅也「そっか。この四人、全員ハロウィンラ

イブに出演するんですもんね」

佐代子「うちーは、本番翌日大丈夫？」

雅也「さすがにそこは仕事入れてません」

佐代子「また、主催者側と決めます」

8 街（週末）

台風が直撃し、雨風が強くなっている。

9 木内家・雅也の部屋

パソコンで仕事をしている雅也――外から強い雨風の音が聞こえる。

N 「結局台風は地元を直撃し、この週の稽古とハロウィンライブは中止となりました。その日のうちに、ハロウィンライブはミュ

ージカル本番の翌日に延期になったという
連絡が国枝さんからありました」

10 同・表（翌週）

雅也が待っている。

N「その翌週、僕は久しぶりに高校時代のメ
ンバーと集まることになりました」

と、一台の車が入ってくる——運転席
に良樹、助手席に一磨、後部座席に康
行。

康行「お待たせ」

一磨「よッ」

良樹「さ、乗って乗って」

雅也「ありがとうッ」

11 街を走る乗用車の中

雅也、良樹、一磨、康行が話している。

雅也「成人式以来だよね、この四人で集まる
の」

一磨「そうなるよな。康行とは、ちよくちよ

く和太鼓の集まりとかで会ってたけどさ」

雅也「俺も、個別ではみんなとそれぞれ会ってたけど、やっぱり四人で会うのが良いね」

良樹「さすが貫禄のある木内の言葉は、重みがあるね」

一磨「貫禄しかないもんね」

康行「だてに人生八十年生きてないよね」

雅也「あのさみんな、久しぶりだからって俺のことイジりすぎだろ」

一磨「そんなことはないよ」

雅也「あのね、三対一は不利だからね。せめてもう一人ぐらい、こっちに来てもらわな

いと」

良樹「そりや無理だわ」

康行「とてもとても木内側に行くなんて。そんなキレイキレイのツツコミなんてできません」
雅也「言ってくれるじゃないのさ」

12 カラオケ店

一磨が歌っており、手拍子等をして盛

り上げている雅也、良樹、康行。

N 「久しぶりで四人で過ごす時間は、あつと
いう間でした。カラオケの後のご飯も盛り
上がり、また四人で集まろうと約束をした
のでした」

13 南公民館・全景

N 「そして翌日の日曜日は、ついに本番前最
後の稽古がやってきました。台風の延期で、
一日稽古がなくなるのは痛手でしたが、泣
いても笑ってこれが最後の稽古日となつた
のです」

14 同・廊下

住吉、美穂子、千世が歩いている。

住吉 「来週のハロウィンライブ、午前中にダ
ンスチームの最終確認するから、よろしく」
美穂子 「まさか台風で延期になるなんて思わ
なかったですもんね」

千世 「台風って、いつも何であんなにタイミ

ング悪いんだろう」

住吉「自然には勝てないのよ。こっちの本番と二日立て続けになるけど、よろしく頼むわよ」

美穂子・千世「はいッ」

15 同・大会議室

美央、洸、ゆりえ、裕作、泰明、亜里沙、隆太、翔、理央たちが休憩をしている。

ゆりえ「じゃあ、本番翌日にハロウィンライブになったんだ」

洸「本番終わった後だけど、まあ仕方ないよ。告知じゃなくて、事後報告みたいになっちゃうけどさ」

裕作「それも変な話だよな」

洸「まさか台風が来るなんて思わないしさ」

美央「本番がある人間からすると、こういう時の台風って厄介な存在だよな」

裕作「分かる」

ゆりえ「本番の日に台風来なかったのが、不

幸中の幸いだよね」

美央「それな」

と、雅也が入ってくる。

雅也「おはようございます」

一同「おはようございます」

緑「うっちー、ちよつと（と手招きをする）」

雅也「どうしたんですか？」

緑「聞いたよ、メンバー辞めるって話」

雅也「ああ、そのことですか……」

緑「私もさ、これが終わったら辞めようと思

ってたから」

雅也「そうでしたか」

緑「むぎも、本番終わったらメンバー辞める

話、国枝さんにするんだって」

雅也「やっぱり、活動終了のタイミングなん

ですかね」

泰明「まあうっちーなら、これからいろんな

舞台立てるよ」

雅也「僕はぜひ、やっさんと共演してみたい

ですけどね」

泰明「嬉しいこと言ってくれるじゃん」

雅也「本当ですって」

と、亜里沙たちの話す声が聞こえてくる。

亜里沙「どうしたの、りゅーた」

隆太「別にどうもしない」

理央「何かあった？」

翔「絶対今日元気ないよな」

雅也、気が付いて亜里沙たちのもとへやってくる。

雅也「どうしたの？」

亜里沙「今日、りゅーたが元気ないの」

雅也「りゅーた、どうしたの？」

隆太「……」

雅也「話してごらん、うちーに」

隆太「今日が稽古最後なんだなと思って……」

雅也「りゅーた……」

隆太「だってさ、本番が終わるとみんな離れ離れになって会えなくなるじゃん」

翔「りゅーた、それを気にしてたのか」

理央「また会えるよ」

雅也「そうだよ。何もずっと会えなくなるわけじゃないし」

隆太「……」

雅也「まあ確かに、元々の『スリジェネ』の公演だったらさ、メンバー同士で同じ舞台に立つから、また次も一緒にできるけど、今回はメンバーだけじゃないもんね」

亜里沙「結構こういうところ、気にするんだよね、りゅーたって」

雅也「感受性が豊かなんだな、りゅーたは。普通の小学校五年生だと思ってたけど、そんなことなかったんだ」

隆太「……」

雅也「打ち上げも多分あるから、本番終わってもまたみんなと会えるって」

隆太「……」

雅也「りゅーた、自販機一緒に行くか」

隆太「……行く」

雅也「よし、おいで」

と、隆太の手を引いて出ていく。

緑「年の離れた兄弟見たいですね」

泰明「良い二人だよ」

16 同・表

自販機でジュースを二本買っている雅也——一本を隆太に渡す。

雅也「はい」

隆太「ありがとう」

雅也「りゅーたは、うちーにとっては弟みたいにかわいい存在なの。だから、本番が終わっちゃうからって悲しい顔はしないで。

また一緒に舞台に立てる日が来るって思いたいから」

隆太「うちー……」

雅也、微笑みながら隆太の頭を撫でる。

つづく